

会では、2005年からの10年間を「ESDの10年」とする決議案が満場一致で採択された。ESD教育の目標として、1) 持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること、2) すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること、3) 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと、の3点が挙げられている(文科省HPによる)。ESDは、「持続可能な社会を作るための担い手作り」であり、そのためには、環境教育、エネルギー教育、国際理解教育、世界遺産・地域遺産教育など様々な分野を多様な方法を用いてつなげ、総合的に取り組むことが必要であるとされる。

このような潮流は、当然のことながら地理学、地理教育の在り方にも重要な影響を与えている。新学習指導要領(小学校2011年度から、中学校2012年度から、高等学校2013年度から)にESD教育が導入され、地理関係では中学校社会と高校地理Aにおいて盛り込まれている(中山ほか、2012)。

しかしながら、教育の現場において、実際にどのような授業実践を行えばよいのか、またどこまで行うべきなのか、教育関係者も手探り状態というのが本音であろう。本書は中学校、高等学校における12の授業実践例を通して、ESDの理念を取り入れた地理教育を行うための「実践可能なマニュアルづくり」を企図したものであり、まさに地理教育関係者にとって待望の一冊といえるだろう。

著者らは、日本地理教育学会内のワーキンググループである「ESD研究グループ」(2008-2010年)の参加メンバーであり、この研究会の活動をベースに本書は編纂された。本書は大きく実践編と理論編の2部から構成されるが、簡単に内容を紹介したい。実践編では12の授業実践が収録さ

泉 貴久・梅村松秀・福島義和・池下誠編：『社会参画の授業づくりー持続可能な社会に向けてー』古今書院、2012年8月刊、133p., 3,200円(税別)

持続可能な社会の構築は、21世紀の人類における最重要課題といっても過言ではない。「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(ヨハネスブルグサミット)において、日本は、「持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)の10年」を提案し、同年の国連総

れている。実践編は、Ⅰ身近な地域、Ⅱ社会参画、Ⅲ多文化・相互依存、Ⅳ地球的諸課題（グローバルイシュー）の四つに分類され、それぞれに三つのテーマ（論文）が配されている。

Ⅰは、土地利用の変化や生活環境、生態系（緑被率）にかかわる身近な地域の調査の実践報告である。1.1『身近な地域の調査－先人の思いと社会参画－』（鈴木拓磨）では、豊玉地区（東京都）における新旧の地形図比較やフィールドワークを通して、生徒たちが地域の美点や課題を見出し、地域への愛着を深めることを通して、持続可能な地域作りに参画する姿勢を養うことが意図されている。1.2『「安全な生活」とは？－より良い生活環境を実現するために－』（吉川真生）では、生活地域における「安全」「危険」な場所にかかわる地域調査を通して、より良い生活環境の実現を目指すことをテーマとしている。1.3『みどりは町の財産！－Google 画像で緑被率をしらべよう－』（梅村松秀）では、衛星画像を用いた緑被率を手がかりに、より良い地域作りの理解と意識を持たせる学習活動案が提示されている。

Ⅱは、持続可能な社会を作るための直接的なテーマが扱われる。2.1『輪中地域における持続可能な土地利用の開発』（高田準一郎）では、木曾三川が合流する輪中地域を取り上げ、地形図を用いた土地利用の読み取りから、洪水常襲地帯における人々の生活と自然とのかかわりを理解させることを通して、防災意識の変化と防災教育の重要性が喚起される。2.2『地域力に根差した持続可能な社会づくりと市民参加』（内野善之）では、離島（島根県海士町）を事例に、「よそ者、わか者、がんこ者」がもつ地域（を拓く）力のポテンシャルに着目し、地域活性化を例としたESDを検討している。2.3『日本のエネルギー問題を考える－原発総選挙－』（柴田祥彦）では、東日本大震災による原発事故という未曾有の災害と日本の

自然環境やエネルギー資源の学習を有機的に結びつけ、「AKB48」の総選挙を模した「原発総選挙」を実施し、参加型授業の実践報告を行っている。

Ⅲでは、多文化・相互依存性をキーワードに、国際理解を目指す3テーマが取り上げられる。3.1『ムスリムとの多文化共生を考える』（永田成文）では、イスラム教国の事例としてサウジアラビアにおける人々の生活文化を取り上げ、多文化共生の視点からムスリムの行動様式と宗教的価値観を探究している。3.2『持続可能なオーストラリアのあり方－多文化主義の視点を通して－』（池下誠）では、オーストラリアの多文化主義政策を事例に、多文化共生社会への理解とともに、多文化主義が内包する問題点について取り上げている。3.3『モノの移動と世界の相互依存性』（宇土泰寛）では、食料品や衣服など身近な日常生活品における地球規模での移動性を通して、宇宙船地球号に乗る私たちの相互依存性を考えさせる授業実践が示される。

Ⅳでは、地球的諸課題の中から地球環境問題、食料問題、人口問題などの興味深い事例が紹介される。4.1『アマゾン熱帯林の現状と持続的発展』（泉 貴久）では、アマゾンの森を開発するのか、保全すべきか、グループ学習での実践を通して、地球的課題を理解し他者との協働により持続可能な社会づくりを志向する取り組みについて、詳細に論じられる。4.2『謎の円を追え－水問題と地球温暖化問題と食料問題－』（伊藤裕康）では、水資源問題を手がかりとして、環境、食料、人口、都市・居住、資源・エネルギーなどの諸問題の相互関連性を考えさせることにより、ESD 授業開発を行っている。4.3『人口問題と自己決定権－将来何人子どもを持ちたいですか－』（福島聖子）では、先進国と発展途上国における人口問題の差異といった従来のカリキュラムを踏襲しつつ、それを個人レベル（あなたは何人子どもを持ちたいか）

まで落とし込むことによって、ESD の授業として活用を企図している。

続く理論編では、3編の論文が収録され、ESD の視点・ねらいについて、概念的な説明が施されている。1『ESD の概念・特徴と地理教育－ESD の普及・発展へ向けて－』（泉 貴久）では、ESD の定義および特徴、地理教育との関係、国内外における ESD の現状および今後の展望が示される。2『持続可能な地域社会の構築に向けて－生物多様性から社会的多様性へ－』（福島義和）では、持続可能な地域社会のあり方（モデル；図1）と、いかにしてその担い手を作るかについて示唆される。3『IGU/CGE が提起する21世紀地理教育パラダイム－「人間－地球」エコシステム－』（梅村松秀）では、国際地理学連合・地理教育委員会（IGU/CGE）が提唱した「人間－地球」エコシステムの理念を解説するとともに、ESD における体系的なアプローチの有用性を提起している。

本書の特徴として、評者は以下の3点を挙げたい。第一に、忙しい日々を過ごす教員にとって、ESD を体系的に理解するうえで本書は格好の教材となる点である。理論編の3編の論考を読めば、ESD の概念および地理教育とのかかわりを理解することが可能である。図1は編者の一人である福島によるモデル化の試みであるが、持続可能な地域社会を構築するために、地理教育がいかにかわるか、またどのような側面で重要であるかが示されている。本書は、持続可能な社会の構築という理念には共感しつつも、地理教育の現場で授業実践に取り組む上での困難さを覚えている中学校・高等学校の教員にとって、ESD の具体的なイメージを作る手助けとなるだろう。

第二に、何よりも本書の魅力は、実践編に示された12テーマにかかわる授業実践例である。各テーマについて、指導計画や授業展開について、

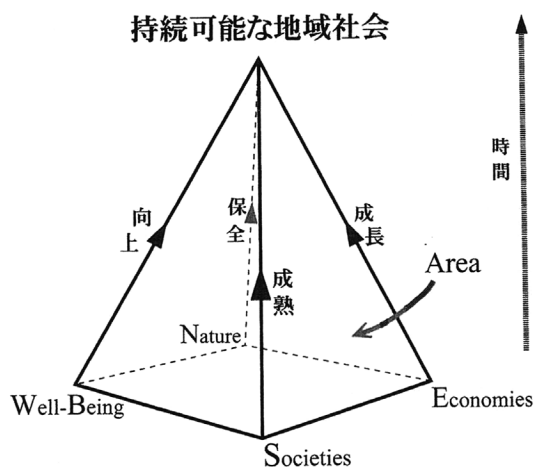


図1

詳細な内容をコンパクトにまとめることに成功している。これらは表として整理されたとともに、授業実践の経験と反省（ふりかえり）、アドバイス（読者へのメッセージ）、教材開発のための文献リストが提示されており、優れた学習指導書として読むことが可能である。単位によっては、授業でそのまま使用できるワークシートが掲載されており、その意味で、「誰もが実践可能なマニュアル作り」（本書はしがき）に成功したものといえる。

第三に、実践編各テーマと「持続的な開発」概念および「学習指導要領地理・大項目」とのマトリクスが示され、本書で取り上げられた授業実践と ESD および学習指導要領との関係が明示されている点である。このマトリクス（梅村松秀作成）によって、編集本にありがちな不統一感やアラカルト的といった不満が解消されている。「持続的な開発」概念とのマトリクスには、イギリスにおけるナショナル・カリキュラム地理（KS3）（キーステージ3；第7学年から第9学年相当、日本では中学生に当たる）の概念（KS3については、志村2010、野間・小泉2012を参照）や defra（イギリス環境・食糧・農村地域省）の提起した「持続的な開発」概念の枠組みが援用され、ESD との対応

関係が明示されている。著者らのバックグラウンドは小中学校教員から高校・大学教員に及び、対象とされるテーマもまた多岐にわたるが、12の授業実践のねらいがマトリクスで示されることにより、総花的ではなく網羅的・体系的な読後感が得られたことを指摘したい。

本書はタイトルからも明確のように、中学・高校教員を対象としているが、地理教育全般さらには、持続可能な社会づくりに関心を有する人に広く読まれるべきであろう。そのためには専門用語に語釈をつけるなどの配慮が必要になるものと思われる。周知のように現代における地理学は、社会貢献やグローバルな人材育成を離れて成立することは困難な状況にある。地理教育を専門としない評者であるが、地理教育にかかわる一教員として、ここで紹介された授業実践の試みに興味をもつとともに理論的枠組みから学ばせて頂いた。本書はESDを考える上で手引きとなるものと考え

(松井圭介)

文献ほか

- 志村 蕎 (2010) : 『現代イギリス地理教育の展開』 風間書房.
- 中山修一・和田文雄・高田準一郎 (2012) : 持続発展教育 (ESD) としての地理教育. *E-journal Geo*, **7**, 49-72.
- 野間晴雄・小泉邦彦 (2012) : 英国の2007年版『ナショナル・カリキュラム地理』キーステージ3の内容とその特色. *文芸論集 (関西大学)*, **59**(2), 57-64.
- 文部科学省ホームページ : 持続可能な開発のための教育 (ESD : Education for Sustainable Development).
<http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm> (最終閲覧日 : 2013年6月10日)